様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：３５４０８
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４７２０１２５

研究課題名（和文）＜空腹＞のアイルランド：現代アイルランド小説における大飢饉表象の政治性を読み解く

研究課題名（英文）Hungry Ireland: Examining the Political Representation of the Great Irish Famine in Contemporary Irish Fiction

研究代表者
田多良　俊樹（TATARA, Toshiki）

安田女子大学・文学部・准教授

研究者番号：４０５１０４６７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、19世紀半ばに発生したアイルランド大飢饉が、それを直接には体験してない小説家によって、どのように描かれてきたのかを検討した。その結果、20世紀初頭から現在に至るアイルランド作家のなかには、大飢饉の記憶を民族主義的に継承するタイプと、大飢饉をめぐるイギリスとアイルランドの対立を乗り越えようとするタイプの２つの潮流があることが判明した。この点は、ある国家の歴史的悲劇に対する文学的応答の例として、震災後の現代日本社会にとっても意義を持つと考えている。

研究成果の概要（英文）：　This study has exmained how the mid-nineteenth century Great Irish Famine is represented by post-Famine writers who have never experienced this calamity directly. There are two separate trends: Some writers represents the tragic memory of the Famine for natinalistic purposes, while others use the memory of the Famine to reconcile the racial confrontation between the Brish Empire and colonial Ireland. These trends can be taken up as an example of a literary response to a historical tragedy on a national scale. In this sense, this study is of value for Japanese society, which experinced the Great East Japan Earthquake (March 11, 2011).

研究分野：20世紀アイルランド文学

キーワード：アイルランド文学　アイルランド大飢饉　記憶　政治性　帝国主義　民族主義

１．研究開始当初の背景

本研究の着想は、東日本大震災の直後から、「文学（研究）には何ができるのか」という点が真剣に問われている事実に拠る。未曾有の被害を伴い、沈静化後も国家的悲劇として記憶され続けるこの種の災害に際し、文学はいかに応答する（あるいは、応答できる）のか。

本研究は、この問題に対するひとつの回答を導くために、19 世紀半ばに起きたアイルランド大飢饉と現代アイルランド小説の関係性を検討するものである。

２．研究の目的

本研究の目的は、19 世紀半ばに生じたアイルランド大飢饉が、それを直接には体験していない現代アイルランド作家の小説作品において、どのように描かれてきたのかを包括的に考察することにある。この目的のために、(1)大飢饉とその余波に関する社会学、歴史学、経済学の研究資源を学際的に活用した文化研究と、(2)1920 年代以降の代表的な現代アイルランド小説における大飢饉表象とその政治的背景の精査を行う。

３．研究の方法

本研究では、アイルランド大飢饉とその余波に関する修正主義的な歴史学、社会学、経済学などの研究資料を活用し、現代アイルランド小説における大飢饉表象の政治性を考察する。まず、上記の研究資料を集中的に収集したうえで、民族主義的な大飢饉観の妥当性について再考し、分析対象となる作家の時代背景を整理した。次に、人種・階級・ジェンダーによって構成される作家のアイデンティティと、時代の政治的背景とを考慮しつつ、作品分析を行った。具体的には、ジェイムズ・ジョイス（James Joyce）ルイス・J・ウォルシュ（Louis J. Walsh）、リアム・オフラハーティ（Liam O’Flaherty）、フランク・オコナー（Frank O’Connor）、ジョン・バンヴィル（John Banville）およびジョゼフ・オコナー（Joseph O’Connor）による長編・短編小説を研究対象とした。また、研究の展開にあわせて、オスカー・ワイルド（Oscar Wilde）とダグラス・ハイド（Douglas Hyde）を研究対象に追加した。

４．研究成果

(1) 平成 24 年度の研究成果

平成 24 年度は、本研究の理論的土台を確立すべく、アイルランド大飢饉に関する歴史学、社会学、経済学などの研究資料の収集を進め、順次分析を行った。特に、ダブリンのアイルランド国立図書館における資料調査の際に、ルイス・J・ウォルシュの全ての著作を入手できたことの意義は大きい。ウォルシュが現在はほとんど顧みられることのないマイナー作家であるためか、彼の小説は我が国の研究機関には所蔵されておらず、大飢饉に関する国内外の先行研究でも全く扱われていない。しかし、ウォルシュは、ジェイムズ・ジョイスと同じ時期に同じ大学で学んでおり、後者が大学で一般に「大飢饉詩人」と見なされていた詩人ジェイムズ・C・マンガン（James Clarence Mangan）に関する講演をした際には、手厳しい批判を加えた。その後、ウォルシュは、民族主義的な観点から大飢饉の悲劇を小説化している。大学時代の衝突に見られるように、両者の作品を比較することで、大飢饉小説研究に新たな展開をもたらす可能性は高い。この意味で、ウォルシュ作品の入手には意義があった。

平成 24 年度の下半期からは、収集した資料の分析を踏まえつつ、現代アイルランド小説における大飢饉表象の政治性について検討を始めた。ここで集中的に取り組んだのが、ウォルシュの教養小説『次の機会に―48 年の物語』（*The Next Time: A Story of ’Forty-Eight*）と、ジョイスのモダニズム小説『ユリシーズ』（*Ulysses*）の比較検討である。

前者は、主人公が弁護士として自己実現していく途中で発生した大飢饉の惨状を写実的に描写している。主人公は、弁護士として成功する夢を投げ捨て、やがて大飢饉の最中の 1948 年の青年アイルランド党の蜂起に参加し命を落とす。大飢饉を大英帝国の失策と見なして武装蜂起したアイルランド民族主義の理想化が散見される『次の機会に』は、そのタイトルも示唆するように、大飢饉を民族主義的に表象することで、その記憶を後世に語り継ぐことを意図している。

これに対して、大飢饉が終息して約 50 年後を舞台とするジョイスの『ユリシーズ』では、主要登場人物たちは、大飢饉に関する民族主義的な見解を継承しながらも、大飢饉を契機に先鋭化するイギリス帝国主義とアイルランド民族主義の対立を乗り越えようとしている。したがって、ジョイスの『ユリシーズ』は、時代設定的にも、イデオロギー的にも、「ポスト」大飢饉小説と定義できる。ジョイスのマンガン論をウォルシュが攻撃した理由も、ジョイスがマンガンと大飢饉の関係性をあえて無視することによって、マンガンを民族主義の文脈から解放しようとしたためであった。

このような比較検討を通して、本研究は、ポスト大飢饉世代の作家による大飢饉小説には、以上のような２つの潮流―民族主義的大飢饉観の継承を志向する小説（ウォルシュ的ポスト大飢饉小説）と、民族主義的大飢饉観に共感しながらも、民族主義の暴力的発露には与しない小説（ジョイス的「ポスト」大飢饉小説）―が存在することを明らかにした。

また、この比較結果を、平成 25 年 3 月にオランダで開催された国際学会 “Global Legacies of the Great Irish Famine” にて口頭発表した。本学会には、文学だけでなく、歴史学、社会学、人口統計学、文化地理

学などを専門とする欧米の研究者が多数集結していた。そのため、本研究が提示したウォルシュとジョイスの比較論考に対し、一定の評価と、学際的な知見を得ることできた。さらに、アイルランド国立大学ユニバーシティ・カレッジ・ダブリンのマーガレット・ケラハー（Margaret Kelleher）教授からは、本研究に対する継続的な協力を快諾いただいた。これらの意味で、本研究発表は、非常に有益で意義あるものになったと言える。

最後に、この口頭発表の一部は、平成 26 年に「James Joyce の “Great Hunger”—ポスト大飢饉小説としての *Ulysses*」という論文にまとめられていることを付言しておく。

(2) 平成 25 年度の研究成果

本年度は、前年度の口頭発表をもとに、ウォルシュに関する論文を脱稿した。ただし、この論文は、意図した媒体に掲載することが叶わなかった。今後、すみやかにブラッシュアップし、別の学術誌への掲載を目指したい。

また、オフラハーティとフランク・オコナーに関しては、先行研究を収集のうえ批判的に検討し、それぞれの代表的な大飢饉小説を分析した。オフラハーティは『大飢饉』（*Famine*）において、大飢饉を現代アイルランドの民族主義の起源として扱っており、この点でウォルシュの系譜に連なる。ただし、オフラハーティは、イギリス系の出自を示す母方の旧姓を偽名として使い、英国近衛歩兵第４連隊に所属した経歴を持つ。オフラハーティにとっては、大飢饉の記憶が、アイルランド人のアイデンティティ再確認の手立てとなっている。

一方、オコナーは、ジョイスの系譜に連なると言える。短編「幽霊」（“Ghost”）では、大飢饉時に立ち退きを迫られアメリカに渡った小作農の子孫が、祖先の土地を表敬訪問し、自らの祖先を追放した地主の子孫と懇意になる。先祖の仇敵と懇意になったことに戸惑うアイリッシュ・アメリカンを描くオコナーは、後世に残る大飢饉の影響を正確に描きつつも、大飢饉を単に民族主義を高揚させるために利用しているのではない。この意味で、オコナーの「幽霊」もまた、「ポスト」大飢饉小説の一例だと言える。

オコナーの短編を考察したことにより、現代大飢饉小説における「大飢饉時の移民」と、「その子孫のアイルランドへの帰還」という重要な要素が発見できた。これらは今後の研究でさらに掘り下げていきたい。

平成 25 年度にはまた、前年度のジョイス研究から派生した論文「『ベルファストの贈り物』、あるいは大飢饉後のアイルランドにおける『魔女』—『土』の政治性を再考する」を、日本英文学会の学術誌『英文学研究』支部統合号に掲載することができた。本論文は、「土」（“Clay”）の主人公が魔女のイメージを帯びている理由を、大飢饉の余波という社会的状況に照らし合わせて論じたものであり、当該作品と大飢饉の関連性について、新しい視点を提供できたと考えている。

(3) 平成 26 年度の研究成果

本年度は、現在活躍中のアイルランド人作家の小説作品を研究対象とし、彼らにとってもはや遠い過去の出来事となった大飢饉がいかに表象されているかを検討した。特に、ジョゼフ・オコナーの長編小説『大海の星』（*Star of the Sea*）の分析に取り組んだ。本作品は、大飢饉当事にアイルランドからアメリカへ向かう移民船を舞台としており、技法的にはいわゆる「モンタージュ」が駆使されている。手紙、引用、一人称の語り、議事録、航海日誌、バラッド、広告、新聞の切り抜き、史料といった大飢饉に関する諸々の言説の集合体であるこの小説は、大飢饉に関する作者オコナー自身のリサーチの産物であり、かつ大飢饉に関する多角的な視点を読者に提供している。この意味で、『大海の星』は、ポスト大飢饉時代の歴史編纂小説である。

ただし、それは、たとえばバンヴィルの小説『バーチウッド』（*Birchwood*）のように、実験的な小説形式で大飢饉の記憶を曖昧化することを意図してはいない。むしろ、オコナーは、大飢饉という歴史的事象が立場によって異なる様相を見せるという多面性を示すことで、大飢饉の責任の所在を相対化していると言える。『大海の星』で問題化されるのは、大飢饉を作り出したと歴史的に非難されてきたイングランド当局だけでなく、大飢饉で利を得たアイルランドの商人階級と裕福な農民たちなのである。

アイルランド大飢饉におけるアイルランド人の有責性を可視化した点で、オコナーの『大海の星』は、ジョイス的な「ポスト」大飢饉小説の流れを汲みつつ、その系譜のなかで新たな展開をも見せている。この点を把握できたことは、平成 26 年度の最大の収穫であった。

さらに、大飢饉の文化的影響として挙げられるゲール語（アイルランド語）話者の減少をめぐる文学・文化の反応について検討した成果を、日本ジェイムズ・ジョイス協会のシンポジウムにおいて、「牙を剥く Joyce—Stephen の吸血鬼詩の counter-vampirism」と題して発表することができた。

また、論文集『幻想と怪奇の英文学』に収録されたワイルド論では、「カンタヴィルの幽霊」（“The Canterville Ghost”）というユーモアあふれる物語に、植民地の逆襲という政治性が潜んでいる理由を、ワイルドの母と大飢饉との関連性から論じることができた。

これら２つは、本研究の当初計画には含まれていなかったが、研究の進捗に応じて検討する必要が出てきたものであり、また実際に検討することによって、本研究が内容的に深みを増したので、ここに記しておく。

(4) 総括と展望

本研究は、大飢饉を直接経験していない作家たちの大飢饉小説に、２つの大きな潮流があることを明らかにした。一方には、大飢饉に関する民族主義的な見解を継承している小説があり、他方には、大飢饉をめぐるイングランドとアイルランドの対立構造を乗り越えようとする小説である。

これは、大飢饉というアイルランドにとっての国家的悲劇を、民族主義の高揚へとつなげるのか、あるいはイングランドとの和解へとつなげるのかという問題に対する文学的応答である。どちらが正解なのかは、実は問題ではない。そのような応答が文学によって示され、小説が読まれることによって、この応答が読者に広まっていくという点が重要なのである。それは、東日本大震災後に「文学に何ができるのか」と問われ続けている我が国においても、悲劇の記憶の継承という点では、ひとつの事例を提供してくれるだろう。

今後の展望としては、本研究で扱った作品のなかでもすでに散見された、以下の２つのテーマに取り組んでいきたい。それらは、すなわち、大飢饉時の海外移民、およびその子孫のアイルランドへの帰還という２つのテーマである。これらを検討することで、本研究が結果的にその一端を提示することになった「アイルランド大飢饉小説史」を拡充することが可能になるはずである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

<u>①田多良俊樹</u>、「James Joyce の “Great Hunger” ―ポスト大飢饉小説としての *Ulysses*」、『英語と英文学と―田村道美先生退職記念論文集』、査読無し、2014、23-32.

<u>②田多良俊樹</u>、「『ベルファストの贈り物』、あるいは大飢饉後のアイルランドにおける『魔女』―『土』の政治性を再考する」、『英文学研究』支部統合号、査読有り、第５巻、2013、255-262.

〔学会発表〕（計４件）

<u>①田多良俊樹</u>、「牙を剥く Joyce―Stephen の吸血鬼詩の counter-vampirism」、日本ジェイムズ・ジョイス協会、2014 年 6 月 14 日、法政大学（東京都千代田区）.

<u>②田多良俊樹</u>、「トム・カーナンは語ることができるか―『恩寵』における植民地表象と噛み切られた舌の政治学」、日本英文学会中国四国支部、2013 年 10 月 19 日～20 日、山口大学（山口県山口市）.

<u>③田多良俊樹</u>、“Intertextual Re-Creation of the Great Irish Famine by Post-Famine Writers: A Case Study of Joyce and Walsh”（「ポスト大飢饉作家によるアイルランド大飢饉の間テクスト的創造：ジョイスとウォルシュの場合」）、 Global Legacies of the Great Irish Famine: Transnational and Interdisciplinary Perspectives（大会名：「アイルランド大飢饉のグローバルな遺産：超国家的・学際的視座」）、2013 年 3 月 25 日～28 日、ナイメーヘン（オランダ）

<u>④田多良俊樹</u>、「ゲール語復興とアイルランド民族運動」、日本独文学会秋季研究発表会、2012 年 10 月 14 日、中央大学（東京都八王子市）.

〔図書〕（計２件）

<u>①田多良俊樹</u>　他、春風社、『幻想と怪奇の英文学』、2014、403（215-241）.

②田多良俊樹　他、日本独文学会、『プラハとダブリン―20 世紀ヨーロッパ文学における二つのトポス（その２）―フリッツ・マウトナーとその射程』、2013、84（22-37）.

６．研究組織

(1)研究代表者

田多良俊樹（TATARA, Toshiki）
安田女子大学・文学部・准教授
研究者番号：４０５１０４６７